

## 第11講 書誌情報の利用

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 文献を同定するために必要な情報とその書きかた

### 1 中間レポートについて

8/17 (月) 17:00 までに書き直して再提出すれば、5点以内の範囲で加点する可能性あり

### 2 期末レポートについて

- テーマを決めて、7/9 (木: 正午まで) に「構想報告書」を提出 (下記参照)
- 7/24 授業時に、レポート進捗状況を持ち寄って討論
- レポート本体を 8/14 (金) 17:00 までに提出 (PDF 形式)
- 「執筆経過」を 8/17 (月) 17:00 までに提出 (下記参照)

提出先はいずれも ISTU。使えない場合は電子メールでもよい。レポート本体については、PDF ファイルのみに限定する (中間レポートと同様)

- 分量は A4 用紙 6 ページ以上
- キーワードを 3~5 個つける (下記参照)
- 文献 2 本以上を参照すること
- 図または表を 1 枚以上ふくめること
- 提出前に誰かに読んでもらうこと (謝辞に明記する)
- その他の様式は中間レポートとおなじ

期末レポートの構成は以下のとおり：

- 種別・表題・著者名・所属・日付
- キーワード
- 本文
- 注 (もしあれば。脚注を使用してもよい)
- 文献表 (文献 2 本以上について必要な書誌情報をあげる)
- 謝辞

テーマは、各自の興味に則って決める。ただし、時間的な制約の中で、きちんと先行研究にあたった上でオリジナルな内容を盛り込めるテーマでなければならない。大きな研究につながるようなテーマの中で、できるだけ小さい範囲にしばりこむのがよい (教科書 pp. 13-21)。

## 2.1 先行研究の探索

先行研究を探するには、詳しい人（教員や大学院生など）に聞くか、入門書・概説書を探すかして、基礎的な情報をまず仕入れるのが常道である。たとえば、その分野の常識的な知識、基本的な用語、既存の論争や学派の違いなど。この段階では、図書館よりは書店のほうに分がある。初学者・一般読者向けの雑誌がある分野では、そのバックナンバーに目を通すのもよい。

その上で、網羅的に文献を探してみる。解説書などの文献表から「芋づる」式に探したり、文献データベースを利用する。図書館のサービスを活用すること。

## 2.2 構想を立てる

- 目標規定文（論文の目標を1文で表現したもの：教科書 pp. 22-24）
- 目次案
- 表題をつける
- キーワードをえらぶ

表題は、内容を具体的に示したものでなければならない。内容に関する情報を詳しく載せるほうがよいが、一方で短いほうがよいというトレードオフ関係がある。副題を活用するなどして、簡潔でわかりやすい表題を工夫する。

表題の例:

- 冷春化：1950-2000年の平均気温の変動
- スチール製空き缶の効率的利用法

キーワードは、本来はデータベースでの検索用である。論文の内容を端的に表すことばを3-5個程度えらぶ（通常は、表題にふくまれていないことばをえらぶ）。

キーワードの例:

- 気候変動, 温暖化, 温室効果ガス, エル・ニーニョ
- 鉄スクラップ, バクテリア・リーチング, 分離工学

## 2.3 文献表の作成

論文の末尾に「文献」というセクションを設け、論文で引用した文献（2本以上）をそこにすべて掲げる。日本語教育学研究室の様式（別紙）にしたがうこと。

## 2.4 謝辞

草稿を読んでコメントしてもらったり、内容に関する改善を助けてもらうなど、執筆にあたって便宜を図ってもらった人への謝辞を最後に書く。何について感謝するのかを明確に書くこと（教科書 p. 208）。必要なら、所属を括弧書きでつける

謝辞の例:

- 「草稿に対する〇〇氏（××大学△△学部）の助言によって文章が大幅に改善された」
- 「xx節の□□は〇〇氏（××大学△△学部）のアイディアによる」
- 「本稿で使用した□□データは〇〇研究所所蔵のものを貸与していただいた」

## 2.5 構想報告書

下記のような様式で構想報告書を作成し、7/9 (木) 正午までに ISTU に提出。

氏名：  
学年：  
学籍番号：

1. 表題 (仮)：
2. 目標規定文：
3. これまでに収集した資料の一覧：
4. 資料収集と執筆にあたっての問題点 (こういう文献が見つからない、など)

## 2.6 執筆経過

期末レポートを書くにあたって、構想報告書以降の執筆の経過をまとめる。

- 収集した文献・資料 (最終的に使わなかったものもふくむ)
- 構想のまとめかた
- 執筆にあたってとくに工夫・苦労した点
- 読んでもらうことで改善された点

8/17 (月) 17:00 までに ISTU に提出

## 3 文献の同定

文献を引用・参照する際には、読者がその文献をまちがいなく同定できるだけの情報をあたえる。図書館を利用して同定するのがふつうである。現在では、ほとんどの図書館が OPAC (Online Public Access Catalogue) による蔵書目録検索サービスを提供する。

- 東北大学附属図書館 OPAC: <http://www.library.tohoku.ac.jp/opac/>
- 日本の大学図書館のほとんどを網羅した総合検索サービス: <http://ci.nii.ac.jp/books/>

図書館には相互に貸借・複写をおこなう仕組み (Interlibrary Loan: ILL) がある。文献が同定できれば、ほかの図書館から取り寄せることができる。(附属図書館の「リファレンス・カウンター」またはオンラインの「MyLibrary」で申し込む)

文献の探しかたについて、東北大学附属図書館では学生のための手引書を出版している。[http://tul.library.tohoku.ac.jp/modules/supp/?cat\\_id=3](http://tul.library.tohoku.ac.jp/modules/supp/?cat_id=3) を参照。

### 3.1 本の同定

本 (市販の書籍あるいは非売品の報告書など、冊子体のもの) の同定に必要な書誌情報：

- 著者 (あるいは編者・訳者など)
- 出版年
- 標題
- 出版社

- 版

書籍中の個々の章の標題・著者、雑誌の個々の論文の標題・著者は通常は図書館の蔵書目録には記録されていない。

### 3.2 雑誌 (論文) の同定

必要な書誌情報：

- 雑誌名
- 巻 (あるいは号): 複数の巻・号の系列が共存している場合があるので注意
- 出版年
- ページ範囲
- 稀に、出版社が必要な場合がある

### 3.3 灰色文献

図書館で同定・入手することがむずかしい文献を「灰色文献」(gray literature) という。

- 新聞記事: いろいろな版があって、記事の特定がむずかしい
- テレビ・ラジオ番組: あとから参照することは通常できない
- インターネット上の情報: 内容が変更されたり、なくなったりする (ただし、学術雑誌を電子化したいわゆる「電子ジャーナル」は、印刷された雑誌と同等のものとみなされている)
- 卒業論文・修士論文: 通常、提出先機関にしか存在しない
- 博士論文: 通常、提出先機関と国立国会図書館にしか存在しない (昨年からは電子版の公開が標準となった)
- 口頭発表・講演・授業: 出席者にしか内容がわからない
- 未発表論文・ワーキングペーパー: かぎられた研究者のグループ内でだけ流通する

おなじ情報が本や雑誌にのっているなら、そちらを参照すること。図書館蔵書目録で探しやすいものを選択するとよい。

## 4 文献表

論文・レポートにおいて参考にした文献については、どのように参考にしたのかを明確にし、必要であれば引用をおこなう。末尾に文献の一覧を掲げる。

文献一覧をどのように書くかについては、さまざまな様式がある (ならべべき要素、要素の配列順、記号の使用法など)。それぞれの分野での様式にしたがうこと。この授業では、日本語教育学研究室の様式 (別紙) に統一する。

## 5 課題

別紙資料の文献表はどのような仕組みで書かれているか? つぎの点に注意して解説してみよう。

- 記号の使いかた
- 個々の文献についての情報の順番
- 文献全体の配列

# 文献一覧

本文の最後に「文献」という章を設けます。ただし、通常の章とはちがひ、セクション番号をつけません。本文で引用した文献はすべてここに掲げます。

文字は、本文よりも1段階小さいものを使います。1行にひとつの文献を書きます。行の先頭を全角2字分「ぶら下げインデント」します。Wordを使用する場合はメニューの「書式」→「段落」で「最初の行」を「ぶら下げ」、「幅」を「2字」に設定してください。

文献は著者名のアルファベット順にならべます。著者名がアルファベット以外の文字で書かれている場合は、その言語の慣習にしたがってローマ字化したものを考えて、その順序にしたがってならべてください。おなじ著者の書いた文献のなかでは、出版年の順にならべます。

個々の文献の情報の書き方は、以下の書式にしたがいます。ただし、以下の書式は、本文が日本語で書かれている文献を対象としたものです。英語その他の言語で書かれた文献については、「日本語以外の文献」の項をみてください。

一般的な形式はつぎのとおりです。

【書籍・報告書】 著者（出版年）『標題』出版社。

【編書中の論文】 著者（出版年）「論文標題」編者『編書標題』出版社，pp. ページ範囲。

【雑誌論文】 著者（出版年）「論文標題」『雑誌名』巻号，pp. ページ範囲。

【学位論文】 著者（提出年）『標題』（卒業論文・修士論文・博士論文の別（年度がわかればそれも）、提出先機関名）。

## 著者等について

- 著者が複数いる場合は、ナカグロ（・）で区切ります。多数の著者がいる場合も、全員の名前を省略せず書きます。
- 名一姓の順になっている著者名については、姓を前に出し、その後に全角コンマをおき、その後に名のアルファベット頭文字を記してピリオドをつけます。たとえば「ポリー・ザトラウスキー」は「ザトラウスキー，P.」とします。
- 編者・監修者については、著者と同様に書き、最後に（編）（監修）をつけます。

## 出版年について

- 増刷・改版を重ねた書物の場合、奥付にいくつもの日付が載っていることがあります。このような場合は、内容の改訂が最後におこなわれた年を採用します。たとえば1980年出版の本の増補改訂版が1989年に出てその後増刷を重ねている場合、出版年は「1989」とします。
- 出版年がわからない場合は（n.d.）と書きます（no dateの略）。
- 近々出版になることが決まっている文献の出版年は（forthcoming）と書きます。

- 著者名・出版年がまったく同一の文献については、出版年に "a, b, c, ..." のアルファベット小文字をつけて区別します。たとえば (2000a) (2000b) のようにします。

## 標題について

- 論文の標題は「」、書籍や雑誌の標題は『』で囲みます。
- 特に注記すべき事項がある場合は、標題のあとにカッコでくくって示します。たとえば、報告書の性格、翻訳者名、叢書名など。

## 出版社について

- 日本国外の出版社については、所在地をカッコでくくって示します。所在地は（都市名，州名など，国名）の順で書きます。州名・国名には、一般に使われている略号を使ってかまいません。また、著名な都市の場合には、州名や国名は省略して、都市名だけでかまいません。たとえば「East-West Center (Honolulu)」のようにします。
- 日本国内の出版物でも、小規模な研究会や民間の研究所、その他識別に困る可能性がある場合には、所在地を示します。
- 個人が発行した文献については、その個人を出版社とみなします。その場合、その人の所属をカッコでくくって示します。
- 一時的な組織（たとえば特定の研究のための研究プロジェクトなど）が発行した文献については、その組織を出版社とし、そのあとにカッコでくくって代表者とその所属を書きます。
- 雑誌の場合、通常は出版社を書きません。これは、雑誌の創刊の際には重複しないように名前をつけるのが原則となっているために、雑誌名だけでたいいてい区別できるからです。しかし、まれに雑誌名が重複しているケースがあります。その場合には出版社または発行者をつけて区別します。たとえば「『文学論集』10, 佐賀大学文理学部, pp. 24-34」のように書きます。

## 雑誌の巻・号について

- 「巻」「号」「集」「Vol.」「No.」等は省略します。漢数字やローマ数字で巻・号が表されている場合も、すべてアラビア数字 (1, 2, 3, ...) で書きます。
- 巻と号 (Vol. と No.) の2段階からなる番号については、号数を半角カッコでくくります。たとえば「33巻4号」は「33(4)」のようにします。ただし、巻ごとのとおしのページ番号を持つ雑誌の場合は、号数は省略してかまいません。
- 2号以上が合併されてひとつの号にまとまっている場合は、号数を半角スラッシュ (/) で区切って列記します。たとえば33号と34号の合併号は「33/34」と書きます。10巻1号と10巻2号の合併号は「10(1/2)」と書きます。

## 通常の文献以外のもの

論文で引用する情報は、永続的に参照できるもので、確実に同定できるものであることが原則です。ですから、下記のようなものはなるべく引用するべきではありません。おなじ情報が本や雑誌にのっているなら、そちらを引用してください。

ほかで入手できない情報であれば、やむをえず下記のようなものを引用することになります。その場合は、以下の規則にしたがってください。

- 新聞記事  
新聞にはいろいろな版があって特定がむずかしいので、縮刷版をつかう。縮刷版なら通常の書籍と同様にあつかえる。
- インターネット上の情報  
著者（年号）「**標題**」<URL> 閲覧日付.  
の形式で文献一覧に載せる。（インターネット上の情報は頻繁に改訂されたりなくなったりするため、閲覧日付が重要になる。The Internet Archive <<http://www.archive.org>> などで過去の情報を探すときに使う。）複数の URL があるときは、永続的で単純なものを選ぶ。  
なお、冊子体の雑誌論文と完全に同一内容のファイルを出版社等が提供するいわゆる「電子ジャーナル」については、冊子体と同じとみなして、通常の雑誌論文として記載してよい。
- 口頭発表  
学会報告の要旨集は、ふつうの雑誌と同様にあつかって文献一覧に載せる。  
発表の際の配布資料は、文献一覧には載せない。どうしても言及する必要がある場合は、文中または脚注で紹介する。
- 未発表の論文  
著者（年号）「**論文名**」 著者名（所属）.  
の形式で文献一覧に載せる。
- 私信  
文献一覧には載せない。どうしても言及する必要がある場合は、著者の了解をえたうえで文中または注で紹介する。

## 日本語以外の文献

本文が英語で書かれている文献についても、日本語文献と基本的におなじ規則を適用します。ただし、つぎの点がちがいます

- ふたりの共著については、著者名を "and" または "&" で区切ります。
- 3人以上の共著については、著者名をコンマ (,) で区切り、最後のひとりの前に "and" または "&" を置きます。
- (編) のかわりに (ed.)、(ほか) のかわりに (et al) を使います。
- 論文標題は2重引用符 “” で囲み、ピリオドをつけます。
- 書籍・雑誌・学位論文の標題はイタリック体で書き、ピリオドをつけます。
- 記号類は半角のものを使います。記号の前後のスペースの入れ方 (前回資料参照) に注意してください。

その他の言語の文献を引用する場合については、上記の日本語／英語のルールを準用するか、各言語圏の標準のルールを使用してください。ただし文献情報の各要素を配列する順序については、どの言語の文献についても上記のルールを適用します。

## 文献表のサンプル

- 文化庁文化部国語課（編）（2001）『国語に関する世論調査：家庭や職場での言葉遣い』財務省印刷局.
- Correll, R. M. and Laird, C. (1976) *Modern English handbook* (6th edition). Prentice-Hall (Englewood Cliffs, NJ, US).
- Kaplan, R. B. (1966) "Cultural thought patterns in international education." *Language learning*. 16, pp. 1–20.
- 三原祥子・影山陽子・澤田尚美・矢部まゆみ（2002）「教師の自己研修における共同アクション・リサーチの可能性：PAC分析による検証」『2002年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会，pp. 185–192.
- Molholt, G. (1992) "Visual displays develop awareness of intelligible pronunciation patterns." Brown, A. (ed.) *Approaches to pronunciation teaching*. Macmillan (London).
- 麦谷綾子・林安紀子・桐谷滋（2000）「養育環境にある方言への選好反応の発達：5～8カ月齢乳児を対象に」『音声研究』4 (2), pp. 62–71.
- 長友和彦（2002a）『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』（科学研究費補助金研究成果報告書：研究課題番号 12878043）お茶の水女子大学大学院日本語教育コース.
- 長友和彦（2002b）「新シラバスはこうして生まれた」『月刊日本語』15 (3), pp. 6–9.
- ネウストプニー, J. V.・宮崎里司（編）（2002）『言語研究の方法：言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版.
- 小河原義朗（1997）『外国人日本語学習者の発音学習における自己モニターの研究』（博士論文，東北大学大学院文学研究科）.
- カッケンブッシュ知念寛子（2002）「文字・語彙の指導」縫部義憲（編）『多文化共生時代の日本語教育：日本語の効果的な教え方・学び方』瀝々社，pp. 78–92.
- 才田いずみ（2001）『双方向通信による遠隔日本語学習支援システムの研究』（科学研究費補助金研究成果報告書：研究課題番号 11680307）才田いずみ（東北大学大学院文学研究科）.
- 才田いずみ（2002）「聞くことと話すことの指導」縫部義憲（編）『多文化共生時代の日本語教育：日本語の効果的な教え方・学び方』瀝々社，pp. 111–126.
- 鈴木淳子（2002）『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版.
- 田中重人（n.d.）「コーディング支援プログラム autocode.awk」<<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~tsigeto/autocode/>> 2013年9月18日閲覧.
- 内山潤（2002）「韓国人日本語学習者の格助詞の習得に関する研究」『言語科学論集』6，東北大学大学院文学研究科言語科学専攻，pp. 37–48.
- 宇井美代子（2001）「ジェンダー・性役割」山本真理子（編）・堀洋道（監修）『心理測定尺度集 I：人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』サイエンス社，pp. 137–172.